令和４年度　関東甲信越建築士会ブロック会　青年建築士協議会

２０２２　長　野　大　会

第一分科会　『再生に向けた想い』　実施要項

１．趣旨

活動することが難しい中でありながらも、われわれ建築士は地域活動を実践してきました。そこには多くの苦悩があったことでしょう。今年度もリモートでの地域実践活動の報告となります。リモートや録画の特性を活かしたアイデア溢れる動画で伝えたい活動、得られた知識、共有したい思いを青年建築士の仲間に届けてほしい。そして今日得られた事を持ち帰り、各都県でより良い未来に向けて地域を『再生』してほしい。

２．タイムスケジュール

日時：令和４年６月１８日（土）10：35～12：30

３．発表内容

長野大会テーマでもある「**ずく（やる気）**」をだした活動の報告になります。
コロナ過でありながらもずくをだして始めた新規の活動、感染対策を考え実行した継続活動、またコロナ終息後を見据え仲間と考えた活動計画、青年建築士の仲間と共有した未来に繋がる交流など、青年建築士の今と再生への想いを伝える事を目的とします。

４．発表方法

みなさん【プレゼン＝パワポ】に縛られていませんか？大ホールで登壇してのプレゼンならそれで良いかもしれませんが、今回は録画・動画でのプレゼンとなります。パワポ以外の何か？それは、６分間のドラマやドキュメント、アニメであったり、活動を伝える方法は無限に考えられます。コロナ禍だからできないではなく、コロナ禍だからこれまでの殻を破っての新しいプレゼンがあっても良いと考えました。

録画配信だから出来る事が無限にあると思います。長野大会では、そんな可能性も探れればと思い、発表は動画提出とします。

・10 都県代表者による ZOOM ウェビナーを使ったオンライン形式でおこないます。
・発表者は、発表動画（6 分以内）を撮影・編集し、予め提出をしていただきます。
・発表イメージ
　１）　司会からの紹介後、発表者が自己紹介と発表内容概要を説明（30 秒以内）
　２）　説明後、予め提出された発表動画（6 分以内）を放送
　３）　動画終了後、３分程度の質疑応答

発表者への代表者による質問及び、視聴者からのチャット上の質問を司会者から発表者に質問し、発表者に回答していただきます。

５．審査員及び審査方法

①表彰

・最優秀賞一組、優秀賞一組

・合計得点の最も高かった一組を最優秀賞とし、次点を優秀賞とします。

・最優秀賞受賞者は、全国大会への出場権が与えられます。

②審査員

・関ブロ理事及びオンライン参加者全員が審査可能です。

③審査項目

活動内容・地域貢献度・プレゼン力の３つの項目を評価基準とし、
10 都県のうち、最も良かった２都県を選んでください。

④審査方式・投票方法

・投票は、google フォームを使用した投票方式とします。団体視聴などにより、google フォームでの投票ができない場合、FAX による投票も可とします。

・投票は記名式とし、一人１回とし、自県への投票も可とします。

６．第一分科会発表者

番号	発表タイトル	都県名	発表者
1	海岸漂着物でオリジナルランプを作ろう	新潟県	坂下　尚之
2	視点を変えてみよう！	千葉県	三谷　政太郎
3	活動を止めるな！新しい青年委員会活動のカタチ -青年委員全員で乗り越えたコロナ禍 2021-	東京都	加藤　雄介
4	コロナ禍の中で身近にある ずく『やる気、根気』を探して	群馬県	藤川　匠
5	スクール☆ウォーズ ～「ずく」無し建築士の 45 日戦争 ～	山梨県	遠藤　恭範
6	ワクワクを届けたい！ 『 オンラインで継ぐ建築士活動 』	神奈川県	新木　聡美
7	リストラ～再スタートの一歩～	栃木県	佐藤　大介
8	三方良し -埼玉県戸田市空き蔵改修プロジェクト-	埼玉県	田原 誠
9	「建築士が地域を考えるコンシェルジュとして潜在する魅力の発信を行い、人々の流れを呼び込むことで地域全体の活性化を図る。」	茨城県	谷　亮介
10	未来の建築士と創る信州環境 ECO コンテスト	長野県	飯田　智

海岸漂着物でオリジナルランプを作ろう

新潟県建築士会
坂下　尚之

１　事業のきっかけ

新潟の海岸に多くの漂着物がある。特に、台風の直後は大量の流木が海岸に打ち寄せられ、それらは行政が処分対応を行っている。これらの流木をどうにか活用できないか？と考えたことがきっかけである。

２　事業のテーマ

今回の事業には大きく二つのテーマを設定した。一つ目は参加者に流木でランプを作り、ものづくりの楽しさを体感してもらうこと。二つ目は海岸でゴミを拾うことにより、ゴミがたくさん落ちていることに気づくこと。また、ゴミ拾いやランプ作りならコロナ禍においても密を回避しながら実施可能と考えた。

３　海岸ゴミ拾い

令和３年８月に一般参加３１名、運営側１９名、計５０名でゴミ拾いを決行した。予想通りプラスチック系のゴミや流木が多くあり、すぐにゴミ袋がいっぱいになった。流木は重いため、砂浜を移動するには予め用意したソリが役に立った。また、近年問題視されているマイクロプラスチックが沢山落ちていたことも確認できた。

４　ランプ作り

流木ランプ作りは、建設工事と異なり図面を描いてから計画的に作るのではなく、不整形な流木を試行錯誤しながら徐々に組み立てるため、どれも個性的なランプが出来た。組んで戻してを繰り返す過程で「こうしたらもっと上手く組める」と途中で気づき、少しずつ形になっていく。この点にものづくりの楽しさが詰まっていると感じた。

５　波及効果

当事業がメディアで報道されたことにより、沿岸部の小学校から出前授業の依頼があり、令和４年２月４日に実施した。６年生の２クラスに対して授業を行い、昆虫の形を模したランプや貝殻で綺麗に飾り付けられたランプなど、小学生らしい個性的な作品が完成した。

今年度の活動を通して、流木ランプ作りは、子供から大人まで楽しめる取り組みだと感じた。今後もこの活動を通じてものづくりの仕事の魅力を伝えていきたい。

視点を変えてみよう！

千葉県建築士会
三谷　政太郎

　これまで千葉県建築士会では、さまざまな活動を通して多様な方との交流を図ってまいりました。それは同じ建築士という資格を持つ者同士ということに限らず、異種業種との交流会や、各種イベントで訪れる一般の方々とのふれあいというものも含まれます。

　異なる職種の方と意見交換を行えば、自分の職能範囲を超えた理解を深めることできます。また、イベントに参加してくれた子供たちや、その家族の方のお話を伺うことで、新たなアイディアや視点に気付くこともあります。一人の人間、一つの会社では限界のある、そういった機会を多く設けられることが建築士会の役割の一つであると考えています。

　しかし、2019 年末に発生した新型コロナウィルスは感染拡大の一途をたどり、世界的な流行となりました。日本もその渦の中に巻き込まれ、様々な行動が制限されることとなりました。人の移動の制限に始まり、各種公共施設の休業、イベントは開催できなくなり、飲食を含めた大人数での会合も自粛することとなりました。

　そういった制限が課されている今だからこそ新しいものに目を向けるチャンスであると、千葉県建築士会青年委員会では、それぞれの委員が「ずく出し」、アイディアを持ち寄って議論を交わしました。今回は、現在進行している試みのうち、ドローン講習会と、オンライン見学会についてご紹介します。

■ドローン講習会

　先端技術の顔ともいわれるドローンは、すでに大規模工事の土木現場において測量や施工管理での活用が行われています。また、そのような大きな現場でなくとも、例えば戸建て住宅や小規模建物の塗装工事、雨漏り補修工事においては、従来では足場を建てなければ調査のできない場所を撮影することが可能となり、またタイルの浮きなど手作業で行われていた打診検査が、赤外線カメラを搭載することによって効率化が図れるなど、身近な場所での活躍が増えています。

　講習会はドローン操縦の認定資格を持ち、勤務先でも実務に活用している委員が中心となって行っています。先日はドローン活用における法規制などの座学講習とともに、ドローンの実機を用意

して専門業者の指導のもと空中での挙動や操縦方法についての実習を行いました。離陸から飛行、撮影、着陸までの一連の作業を実際に目の当たりにすることで、地上よりも強く風が吹く上空での機体制御やドローン単体での測量精度など、映像で見るだけでは分からないことを学ぶことができました。

■オンライン見学会

コロナ禍以降、これまでの対面での会議からZoomなどを活用したオンラインでの会議を活用し始めた企業や団体は多いのではないでしょうか。実際に集まることなく大人数での意見交換を行うことのできる技術が今後ますます発展していくにつれ、使用する機会が増えていくことは容易に想像できるところです。

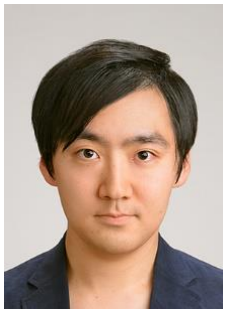
そこで千葉県建築士会青年委員会では、会議室から一歩外へ踏み出し、オンラインを活用した見学会の可能性を模索するため、実践的に活動しています。今までは実際に足を伸ばさなければ見ることのできなかった施設や遺構、自然環境などを、どんな人でもどこからでもアクセスすることができるというのは、多くのメリットを生むことになるでしょう。

今回見学会の場所に選んだのは、日本で初めて認定されたGSSP「国際境界模式層断面」を見ることができる千葉県市原市の養老川流域です。「チバニアン」の名前を聞いたことのかる方も多いのではないでしょうか。その地層が現れている崖は川に隣接していて、増水時には見学ができなくなるような場所にあり、また、ビジターセンターからは勾配18度の坂を徒歩で下っていく必要があります。このような、気軽に見学ができない場所こそ、オンライン見学を実施するにふさわしいと考えました。

撮影スタッフは動画撮影用カメラを備えたジンバルを構え、配信用PCを背負い、約一時間の配信を行いました。同時にドローンによる空撮を行うことで、地上では見ることのできない角度からの見学も可能になりました。参加者からは「現地に行くには時間がとれず、参加できなかったが、オンラインであれば配信時間のみ時間を確保すれば見学できるので、参加しやすい」、「質疑応答もでき、自宅と現場の相互やりとりができるので、YouTubeやTVで番組を一方的に視聴するより勉強になった」という声もあがり、概ね好評をいただいた見学会となりました。

今回の活動で得たことは、知識として知っていることでも実際にやってみなければ分からないことがあるという体験であり、触ったことのないものでもやってみれば形にすることは不可能ではないという経験でした。色々なことが困難となっている現在のような状況でこそ新しいことに挑戦し、一つ一つの研鑽を積み重ねていくことが、その先に繋がっていくのではないでしょうか。

活動を止めるな！新しい青年委員会活動のカタチ
-青年委員全員で乗り越えたコロナ禍2021-



東京建築士会
加藤　雄介

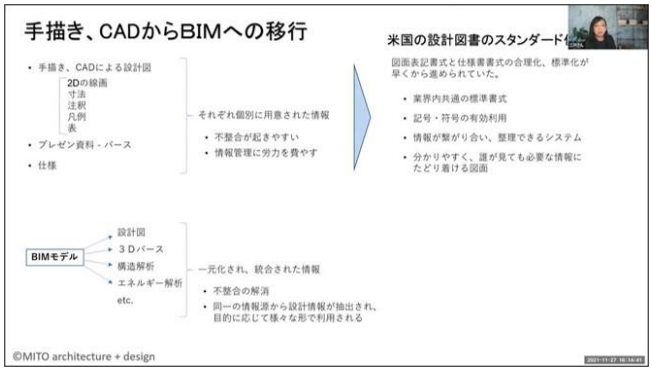
■はじめに

2020 年 4 月に全国に出された最初の緊急事態宣言から、既に 2 年という月日が流れている。我々東京建築士会青年委員会も当初は計画していたセミナーやイベントの自粛、そして委員会活動そのものも儘ならない事態に陥った。しかし、コロナを理由に活動を止める＝青年委員会の存在意義が無くなることではないか、と考えを改め、「何をしたいのか？」「どうしたらできるのか？」を徹底的に議論し、青年委員一人一人から提案されたアイディア「ワクワクの種」をカタチにしていった。今回はその中でも、2021 年度中に行った 3 つの異なるカタチを皆さんと共有したい。

■新しい青年委員会活動のカタチ Case.01
海外から学ぶ
「本当にわかりやすい設計図書」セミナー

・開催日時　2021 年 11 月 27 日(土)
・開催方法　完全オンライン(講師もオンライン参加)
・担当者からひと言

青年委員会として初めての完全オンラインセミナーということで接続不良などのリスクを回避する観点から、協賛会社からの収入で参加費無料のセミナーとした。図面の構成などを細かく画面に映しながら解説する内容であったため、100 人近くの参加者一人一人が一番見やすい”特等席”で参加できるのは、オンラインならではのメリットと感じた。



■新しい青年委員会活動のカタチ Case.02

2022 年合格者セミナー　建築士の働き方 2022

・開催日時　2022 年 2 月 23 日(水・祝)

・開催方法　オンライン(講師の一部は建築士会事務局から参加)

・担当者からひと言

会場開催していた建築士試験合格者向けのセミナーを初めてオンラインで開催した。オムニバス形式の講演を視聴した後、参加者が特に関心のあるテーマに分かれて対談を視聴する形式をとったが、参加者移動なく、スムーズに集散できる等、オンライン開催ならではのメリットもあった。ＳＮＳを通じ、学生等、これまで青年委員会セミナーへの参加が少なかった層にもアプローチできたことも良かった。

■新しい青年委員会活動のカタチ Case.03

(続)SDGs まちづくりプログラム

・開催日時　2022 年 3 月 27 日(日)/4 月 3 日(日)/4 月 10 日(日)/4 月 17 日(日)/4 月 24 日(日)

・開催方法　参集方式(感染対策を十分に講じた形で開催)

・担当者からひと言

「継続は力なり」と言うことで、2 年目を迎えた”まちづくりプログラム”は更にパワーアップ。新たに追加したコンテンツは、①リクシルのタイル部門の方からのタイル解説、②角川武蔵野ミュージアムで隈研吾建築の見学、③神奈川/横浜を舞台に高校生によるプレゼンテーション大会。これからも東京を中心とした勢いのある”まち”を舞台に高校生に建築や”まちづくり”の面白さを伝えていく。

コロナ禍の中で身近にある
ずく『やる気、根気』を探して

群馬建築士会
藤川　匠

近年、世の中はコロナウイルスという感染症の出現により飲食、観光そして建設（建築）業にも多大な影響を及ぼしています。材料の高騰、給湯器などの設備部材の入荷の遅れなど
モチベーションが上がらない事が当たり前の様な世の中になりました。
私たち群馬建築士会渋川支部も主な活動が出来ない状況でいますが、今回の長野大会趣旨であるずく『やる気、根気』という言葉を聞いて身近にある　『ずく』　を探してみました。

～　へその町渋川市　～

渋川市は日本のほぼ中心に位置しており、日本のまんなかへその町とも呼ばれています。
そんな渋川市の中に、『いで湯にまち』伊香保温泉があります。コロナ禍の中どんな『ずく』があるか探してきました。

伊香保温泉は歴史が古く約 1900 年前の第 11 代垂仁天皇の時代に発見されたと言われている。石段の段数は 365 段あり『温泉街が一年 365 日、にぎわうようになってほしい』という繁栄の願いが込められている。

左　　昔の伊香保温泉の風景

コロナ禍で影響の大きい観光業ですが多くの人が訪れ賑いをみせています、これも地元の方々の『ずく』の力
なのではないかと改めて思いました。
私たちもコロナに負けないように自分の中にある『ずく』を探してみましょう。

右　今の伊香保温泉の風景

今の伊香保温泉の風景

石段に刻まれた詩

スクール☆ウォーズ
～「ずく」無し建築士の45日戦争 ～

山梨県建築士会
遠藤　恭範

「ずく」無し建築士の

45日戦争

スクール★ウォーズ

この物語は、ある市民施設の荒廃に戦いを挑んだ、熱血建築士たちの記録である。
設計業界においてまったく無名の「ずく」無し建築士たちが、通常業務では滅多に出さない「ずく」を出し、わずか 45 日で研修室のリフォームを成し遂げ、地域を再生へと導く、その原動力となった信頼と愛を、余す所なく紹介するものである。

「ずく」とは、『甲州弁辞書ウィキペずら』によると
意味：物事に行動する｢気力｣の様なこと　　例文：　この ずく無しめっ！
補足：｢ずくが無い｣とはよく使うが「ずくがある｣とはあまり使わない。
つまり、長野県と山梨県で使用されている「ずく」のニュアンスは同じである。

第１話　きっかけ

山梨県建築士会青年部のメンバーが甲府市役所内を散歩していると、士会に所属する甲府市役所まちづくり部施設整備室の A 課長から相談を持ち掛けられた。「旧市立小学校校舎を利用している甲府市役所西庁舎の一部に協働によるまちづくりを支援する「甲府市協働支援センター」がオープンする。センター内の研修室のリフォーム工事をしてくれる方々はいないかな？」と…。

第２話　なかなかの条件

予算は 0 円、納期 45 日という条件だ。声を掛けられた仲間の脳裏には建築士会青年部の顔が思い浮かび、当時甲府支部青年部長だった私の所へ連絡がきた。厳しい条件だな…と直感するものの、ここ数年間苦楽を共に様々な事業を遂行してきた青年部のメンバーなら期待に応えることができる！と根拠のない安心感から自信を持って引き受けることに…。

第３話　ターニングポイント

スクール☆ウォーズ感あふれる RC 造旧校舎の空き教室。内覧を兼ねた市役所職員との初回ミーティング時、「こりゃあえらいこんだぞ」（これは大変な作業量ですよ）　「んなもんおれんとうだけじゃ終わらんじゃんけ」（このような大変な作業は私たちだけでは終わらすことは出来ませんよ）　「ちったぁ銭ぉ出せしね」（ほんの少しでも良いので予算を出していただけませんか）と慎重に言葉を選んだ結果、市職員も巻き込んだ官民連携の協働作業が始まった…。

第４話　ずくだせ建地区士

作業がスタートして感じたことは建築士の職能は多岐にわたり高度であるということ。短工期での工程調整、素材や色彩の迅速な決定、予算ゼロでの資材調達、施工の手順。各部分に専門家がいて連携して物事を進める協調性の高さも併せ持っている。同時に首・肩・腰に痛みも伴うが、痛がるとたちまち「ずく無し」の烙印を押されてしまうので、顔には出せない…。公約通り市職員の参加もあり、官民の建地区士たちの出面は延べ 100 人以上にのぼった。現場作業で共に汗を流し、官民連携について語り合い、信頼をはぐくんだ建地区士たちであった。

第５話　ライバル現る

こうして「甲府市協働支援センター研修室」は再生した。この活動が市民協働の伸展と認められ、建築士会青年部は甲府市長より「善行章」を表彰された。しかし、腑に落ちないことが…それは、我々の活動は一切メディアで取り上げられなかったのに対し、同施設の「エントランス壁画」を手掛けた南米出身女性アーティストたちは高い頻度でメディアに登場しているという現実…。職能を磨くだけではなくビジュアル面の強化を誓う青年部の面々であった…。

第６話　旅立ち、そして…。

多くの市民から惜しまれつつも南米出身女性アーティストたちが祖国へ旅立ち、月日が流れたある日、例の A 課長から再び相談が…。「話題の壁画があるエントランスホールに多くの人が憩えるように『土間コンクリート』を打ってくれないか？」と。様々な言い訳でお茶を濁す「ずく無し」建築士たち…。

だが、熱血はそう簡単には失われない！始まってしまうのか⁉スクール☆ウォーズⅡ。

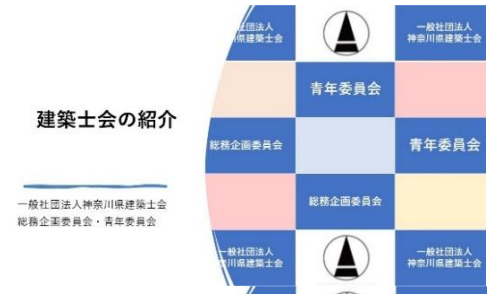
ワクワクを届けたい！
『 オンラインで継ぐ建築士活動 』

神奈川県建築士会
新木　聡美

２０１３年（平成２５年）設計製図受験者向け施設見学会

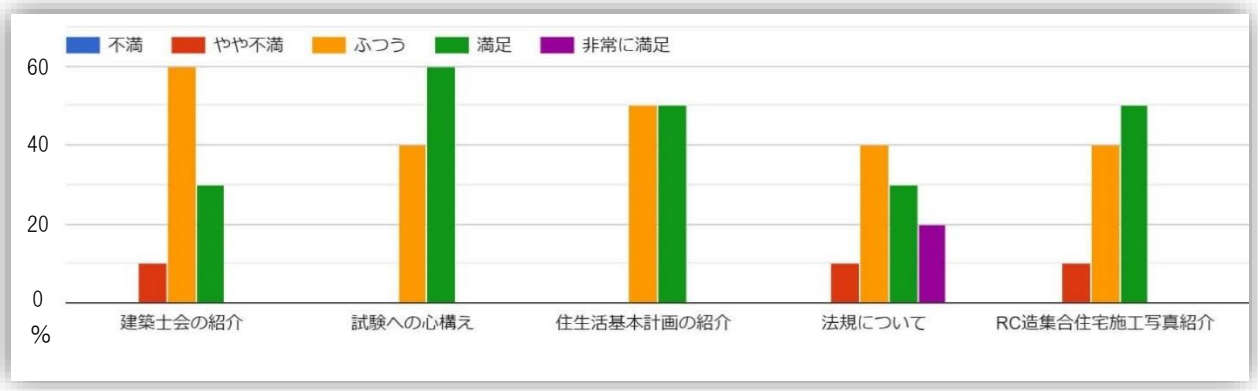
一級建築士試験設計製図試験受験者向け施設見学会「大学のセミナーハウス」を青年委員会で初めて開催した年。私は受験者として参加していた。この時のドキドキ、ワクワクを青年委員会に入って伝えていきたいな～。

令和３年一級建築士試験「設計製図の試験」受験者向け講習会　「集合住宅」



令和２年、令和３年と製図受験者向け施設見学会が中止になってしまったよ・・・。
コロナ禍でも何かできないかと考えて、WEB 勉強会を初めて企画しました～。４部構成の講習会で青年委員会から４名の講師を選定して開催。参加者の皆さんからは満足の声をきけて嬉しかった～。

「設計製図の試験」受験者向け講習会　アンケート結果



青年委員会 YouTube チャンネル　「試験への心構え」

青年委員会 YouTube チャンネル　「免許登録申請解説」

オンラインというツールが今までになかったつながりを生むことができたなぁ。
神奈川県建築士会青年委員会では YouTube チャンネルを開設したよ(^^♪
試験への心構え　１，６００回視聴、免許登録申請解説　７００回視聴
次は建築士会バッチの紹介、みんな見てねー。

一般社団法人神奈川県建築士会　青年委員会

リストラ～再スタートの一歩～

栃木県建築士会
佐藤　大介

源点回帰からの一歩

２０１８年の関ブロ栃木大会という大きなイベント終了後、主要メンバーが青年委員任期満了となり、直近の目標設定を模索する中、新型コロナウィルスの蔓延など様々な要因が重なり、栃木県建築士会青年委員会の活動は消極化が深刻化している。
しかしながら、制限された生活の経験により、今までの「あたりまえ」に対しての疑問や効率性・青年委員会の存在意義や可能性について、改めて考えることができた。
時代に合わせた委員会の再構築のため、我々にできる最初の一歩として、活動内容の見直しや新しい試みなど、できることを「まずやってみる」ことにした。

まずやってみる

長引くコロナ禍の中で普及したオンラインコミュニケーション。
場所にとらわれず移動時間がないため、参加しやすい・効率がよい等のメリットを生かし、会員同士が気軽に交流し情報交換や学びの場をつくることで、現状突破の糸口を見いだせるのではないだろうか？

まずやってみる①　各支部交流会　in Zoom

毎年支部持ち回りで開催していた各支部交流会。地場産業や建物の見学、講演会や親睦会を通して、見聞を広げたり新たな交流が生まれたり・・・参加者にとって有意義なイベントだがコロナ状況により中止せざるをえなくなった。自粛続きで人々の交流が希薄になるなか、なんらかの形で情報交換や交流する機会をもうけることはできないだろうかと考え、オンラインでの飲み会を開催した。

各支部交流会 in Zoomの様子

当日は各々好きな飲み物・食べ物を用意し、自己紹介を兼ねた「推事(オシゴト)time」を設け、地域の推事（各支部の活動報告・イベント案内）・マイ推事（とっておきの宅のみおつまみ・秘蔵の一品・特技紹介）・気になる推事（お仕事や趣味のＱ＆Ａ）など、雑談をしながらお互いの近況報告や情報交換することができた。初の試みは盛会のうちに終了したが、委員同士がお互いのことをよく知らない状態であることも浮き彫りになった。

まずやってみる②　オンライン座談会

栃木県青年委員会では、隔月で定例会議を行っている。本来であれば活動の報告や情報共有・意見交換等が行われるべきであるが、毎回決まった顔ぶれで形式的な会議となっている感が否めない。会議の質向上や参加意義を高めるためには、まずはお互いをよく知ること、会に何ができるのか・何が求められているのかを把握することが重要である。

会議の様子

そこでオンライン座談会の定期開催を企画した。内容は毎月一度 Zoom にて一時間、事前に設定したお題に沿って自由に話し合いを行い、進め方や内容に改善点があれば都度進化させていくこととし、青年委員全員参加を目標とする。また、座談会の様子は動画と議事録で記録を残し、データの蓄積と分析を行うことで、ただ楽しい企画・イベントで終わらせず、今後さまざまな活動展開にも活用できるのではないかと期待している。

第一回目は「ＣＡＤ何使ってますか？」をテーマに、ＣＡＤの比較や利便性・ＢＩＭについてなど、さまざまな側面からの意見交換が行われ、手ごたえは予想以上に感じた。
二回目以降は「保存義務書類どうしてますか？」「おすすめの現場・建物・工法を教えてください」「人生最大の失敗談教えてください」といった気になる話題を掘り下げていく予定である。

第一回オンライン座談会の様子

活動再生にむけて

建築士会活動に参加することの良点の一つは、同業界人との交流であり、そこで得られる情報や学び・人材発掘にもつながることである。

今はやっと一歩踏み出したところであるが、オンラインでできること・オフラインでしたいこと、時代の変化をうまく利用して、新しい活動形態をリストラ（再構築）し、青年委員会の活動が会員の疑問解決や学びの場として満足度の高いものになれば、ひとり一人が活動の有益性を感じることができ、人と人との関係性もより深く築いていけるだろう。

新たな一歩からさらにまた一歩、着実に進めていき、青年委員会の存在意義を高め、活動の輪を広げていきたい。

三方良し
–埼玉県戸田市空き蔵改修プロジェクト–

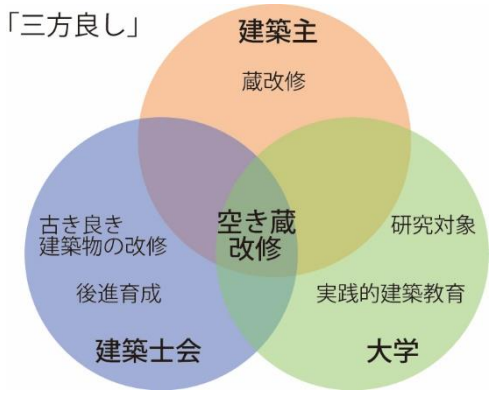
埼玉建築士会
田原　誠

〇はじめに

昨今、空き家に関する様々な問題が取沙汰されています。除却や再利用など、空き家の問題はケースによって解決方法は様々だと思いますが、個人的には、古き良き建築が経済原理によって解体されてしまうことは残念に感じます。
他方、後進の育成は建築業界において常に課題となるところです。実際に建築物が建築される流れの中で得られる経験には多くの学びがあると思いますが、大学の建築教育等においてそのような機会は限られていると思います。
これらの問題・課題を念頭に、埼玉建築士会の有志メンバーで行った「戸田市空き蔵改修」の活動をご紹介します。

〇プロジェクトのはじまり

・埼玉県戸田市のある敷地に母屋と空き蔵があり、家主の飯島知二さんから築年数の古い空き蔵について「改修をしたい」と建築士会のメンバーの大野和則さん、山野井宏和さん、田原に相談がありました。
・単純に建築士事務所や工務店が業務として設計や施工を行うよりも、何か公共に資する取り組みになった方がよいと考え、大学と協働でプロジェクトを進めてはどうかと考えました。



・建築主の「蔵を改修したい」という目的、建築士会メンバーの「古き良き建築物の改修を実現したい」、「後進の育成に貢献したい」という目的、大学の「研究対象とし、実践的な建築教育を行いたい」という目的が、協働プロジェクトとすることによって全て実現でき、機運も高められます。正に「三方良し」というわけです。
・木造建築や空き家を題材として研究・教育に取り組んでいた埼玉県内のものつくり大学戸田研究室とのプロジェクト協働の提案をしたところ、関係者全員の快諾を得られました。またこの頃、ものつくり大学戸田都生男准教授の研究テーマ「木のものづくり教育を活かした木造空き家活用モデルの構築」が科学研究費(19K14105)に採択され、スケジュールも考慮し3年計画としてプロジェクトを進めることとなりました。

〇プロジェクトの進行

・1年目は「調査」を行いました。実測を極力学生が主体的に行い、適宜建築士会メンバーがサポートする形で進めました。また実測を基に既存図の作成も学生が行い、学生が作成した図面を建築士会メンバーがチェックバックして学生が修正する流れで進めました。調査の結果、天保8年に竣工した建築物であることがわかりました。

・2年目は「計画」を行いました。月1回程度関係者が集まって会議を行い、学生の提案に対し、建築主の要望や建築士会メンバーからの意匠性や実現可能性等の意見交換を行い、ブラッシュアップを重ねました。計画では、蔵の小屋組を残すA棟と水廻りをまとめたB棟の2棟を建築することとなりました。A棟については学生がまとめた計画を基に、建築士会メンバーで更なるブラッシュアップを行い、実施設計をまとめました。B棟については、3年目に担当する学生のモチベーション維持を踏まえ、デザインの余地を残しました。

・3年目は「工事」を行いました。A棟は秩父の建築士会員である浦島則之さんが加わった建築士会メンバーと腕の立つ秩父の大工さん(加藤福建築さん、内柳さん)により、現場監理、施工管理及び施工を行い、B棟は極力学生が主体的に参加できるように配慮しました。ものつくり大学は様々な施工実習があり、建て方も学生が皆経験しています。学生たちが自ら考えてつくる環境を、建築士会メンバーがサポートする態勢としました。

・そしてついに完成を迎えました。まちゆく老若男女が足を止めるような、まちなみに資する建築となったと思います。

・この間、ものつくり大学戸田准教授の研究は然ることながら、戸田研究室の多くの学生が関わりを持ち、本プロジェクトを題材として、5作品の卒業設計、3作品の卒業制作、3本の卒業論文が生まれました。

〇まとめ

・空き家という社会的な問題と、建築業界の後進の育成という課題に対し、「三方良し」の体制で取り組むことで、一定の解決方法を示すモデルとなったのではないかと考えます。

・個別のケース毎に工夫は必要だとは思いますが、全国各地域において実践しうるモデルだと考えます。皆さんの地域でも是非実践されてみてはいかがでしょうか。

「建築士が地域を考えるコンシェルジュとして潜在する魅力の発信を行い、人々の流れを呼び込むことで地域全体の活性化を図る。」

茨城県建築士会
谷　亮 介

１．はじめに

つくば市は、昭和 60 年の「科学万博つくば’85」の後に誕生したあたらしいまちです。その後、科学技術の振興と高等教育の充実および東京の一極集中の緩和などを目的として研究学園都市が建設され、東京にあった教育機関や試験研究機関が移転してきました。（JAXA,国土地理院、建築研究所、産業技術総合研究所など）

誕生した 1987 年から 33 年連続で人口が増え続けている全国でも数少ない都市ですが、人口が増えているのは中心市街地が主で周辺市街地は人口流出、空き家の増加が問題となっております。それを解決するため、茨城県建築士会筑波支部では、周辺市街地の魅力を発信し人々の流れを呼び込むことで地域活性化を促すことを目的とした様々な活動を行っております。

２．主な活動

「つくばR8地域活性化プランコンペティション」への参加

つくば市では８つの周辺市街地をR8と称して活性化のアイデアコンペを開催しており、筑波支部は2年連続で参加しました。提案内容は周辺市街地の食・農・暮らしをテーマに体験型のイベントを開催し、かつて地域にあった産業や人の流れを取り戻しサイクルしようとするものでした。ファイナリストとなったものの選定には至らず、残念な結果となりましたが、地域の方々からの印象が良かったので、筑波支部主催で地域密着型のマルシェやワークショップの準備を進めております。

コンペ発表の様子

市（ＩＣＨＩ）in 栄

「市 ICHI in 栄」の開催

ICHIのQR

周辺市街地の一つである栄地区において建築士会筑波支部主催でマルシェを開催しました。
長屋門を構える古民家で開催し、天候にも恵まれ2日間で約1700人の来場者がありました。
（詳細は地域活動実践報告参照ください）

サイクリングロード雷神道(RAIJIN ROAD)の提案

サイクリングを活用しながら、つくば市とつくばみらい市の相互のまちづくりを提案し、残景のある既存の道をブランド化する事で、地域の関係人口の創出・交流人口の増加を図り周辺市街地の魅力発信を行いました。

PVのQR

RAIJIN ROADのPV

「宝篋山トレッキングツアー」の開催

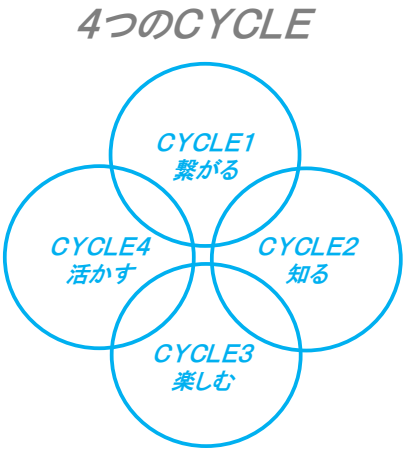
宝篋山山頂にて

宝篋山（別名小田山）はつくば市北東部にある標高461 メートルの山で通年通して様々な自然が楽しめ、山頂からは、晴れた日には筑波山や霞ヶ浦を一望することができます。登山中は宝篋山の歴史の話を交えながら、満開のコブシや芽吹く木々や沢の流れを楽しみ、ゆっくりと山頂を目指しました。登頂後には参加者が手分けしながらもみじ鍋を調理し、おいしいおにぎりと温かい鍋で日ごろの疲れを癒しました。

３．４つのＣＹＣＬＥ（サイクル）

周辺市街地の活性化には「繋がる」「知る」「楽しむ」「活かす」の４つのサイクルが重要だと感じました。それぞれが重なり合い、人が繋がり、流れをつくる事で地域の活性化を進めて行きたいと考えています。

「繋がる」
今後も自然など地域の特性を生かしたマルシェやワークショップを開催し、地域の人たちと繋がります。
「知る」
イベントやワークショップで地域性のある活動を体験し、知る事で魅力発信を行います。
「楽しむ」
サイクリングロードや登山コースを地域のポイントを繋げる事で、新たなアクティビティを創出します。
「活かす」
古民家、空き家を積極的に活用し、移住希望者への案内にも取り組み地域に人々を呼び込みます。

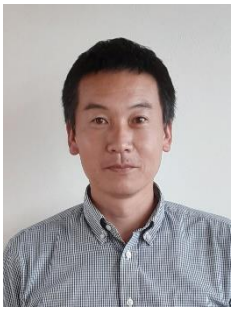


４．活動を通して

これまで各地域の市街地活性化協議会への参加や地域の方々との交流、意見交換によって、発信できていない地域に潜在する魅力の多さに驚きました。今後も積極的に地域の人々と関わる事で、地域密着型のイベントを開催し、建築士コンシェルジュとして移住促進や空家活用などに繋げて行きたいです。

筑波支部のQR

未来の建築士と創る信州環境ECOコンテスト



長野県建築士会
飯田　智

（公社）長野県建築士会青年・女性委員会では、平成 20 年から信州環境 ECO コンテストを開催しております。県内の工業系学生（高校・専門学校・高専など）が対象で、故郷である信州の魅力を発見してもらうこと、建築を楽しんでもらうこと、自由な発想をしてもらうこと、建築士と交流することで、建築を目指すきっかけとしてもらうことを主な趣旨としております。コンテストが始まった経緯は、平成 17 年の青年・女性委員会への合併を機に長野県らしく、若者と交流し、将来建築士を目指す若者に建築士会の存在を知ってもらえる事業をということで始まりました。始めた当初は、学校側との連絡体制も整っておらず、参加に難色を示されることも多かったそうですが、工業高校校長会や教育委員会への協力依頼や、開催を重ねていく中で、応募作品も当初の 105 作品から徐々に増加し、最も多い年で 335 作品と 3 倍になるまで浸透してきました。毎年のテーマは、その時の社会状況や流行を加味して当委員会で決定しています。第 1 回は「県産材を活用したバスストップ」と、海のない長野県らしいテーマに始まり、東日本大震災や長野県北部地震のあった翌年の平成 24 年には「避難所かんたん間仕切」、また、「信州コンパクト住宅」という 4 年に渡るシリーズもありました。令和 2 年には新型コロナウィルス感染拡大の為、初めて中止となりましたが、翌年にはプレゼンテーション動画による審査という形で開催することができました。

長年続けてきた成果として、回を重ねるごとに学校側との関係が親密になったことで、第 7 回の ECO コンテストからは希望があった学校に建築士が伺い、ワークショップを開催しています。ワークショ

ップを行う事で、我々にとっては、学生との交流や士会の PR になると共に、応募数の増加に繋げる事ができます。また、学校側からは、現場で活躍する建築士の意見を聞く事で、普段の授業では得られない経験が積める事や、より具体的なイメージに繋げることができるといったご意見をいただいております。

　我々建築士は、業務として建築を行う中で、建築可能なものを設計する為、できそうにないものを除外してしまう事がありますが、学生には建築可能かどうかは関係ありません。信州環境 ECO コンテストでは、そういった学生たちの自由な発想を大切にしている為、我々建築士が学生に教えられることも多々あります。

令和 3 年度「地域に根差した特産物直売所」応募作品の一例

　15 年続けてきたことにより、歴代出場者から建築士会員が誕生するようになりました。当会飯伊支部の野竹紗英さんはその一例です。彼女も建築系の学校には通っていたものの、明確に建築士を目指していたわけではないそうですが、コンテストに参加し初めて設計やプレゼンを行った事が、今思えば建築の道に進むきっかけになったそうです。

　信州環境 ECO コンテストを継続していく上での今後の課題として、今まで実現していない応募作品の具現化が挙げられます。実現すれば、より一層学生たちのやる気もアップすることでしょう。当委員会では、引き続き学生たちとの交流に努め、一人でも多くの若者が未来の建築士になりたいと思って頂けるような活動を心掛けていきます。